

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Association between maternal smoking history and congenital anomalies in children: results from the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

妊婦の喫煙歴と出生児の先天性形態異常の関連:エコチル調査より

ユニットセンター(UC)等名: 富山ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: CONGENITAL ANOMALIES

年: 2021 DOI: 10.1111/cga.12430

筆頭著者名: 土田暁子

所属 UC 名: 富山ユニットセンター

目的:

日本国内の 20 代から 30 代の生殖年齢の女性の喫煙率は、アジアの他の国々と比較して高い傾向がある。しかし、これまで、妊婦の喫煙歴と出生児の先天性形態異常の関連を調べた大規模な研究は行われていなかったため、両者の関連について検討することとした。

方法:

妊婦の喫煙状況は妊娠前期に配布した質問票より、出生児の先天性形態異常は、出産時と 1 か月健診時の診断情報をカルテ転記にて情報収集した。妊娠中の喫煙状況を「吸ったことがない」、「吸っていたが妊娠前にやめた」、「吸っていたが妊娠に気づいてやめた」、「喫煙している」の 4 群に分け、「吸ったことがない」群を対照として、各群における先天性形態異常の発症のオッズ比を多変量ロジステック回帰分析により算出した。

結果:

喫煙と先天性形態異常の情報がある 91, 626 例を対象とした。「吸ったことがない」群に対し、「喫煙している」群において、トリソミー(調整オッズ比 2.14; 95% 信頼区間, 1.15-3.97)及び何らかの先天性形態異常(調整オッズ比 1.35; 95% 信頼区間, 1.09-1.67)のオッズ比が統計的に有意に高かった。

考察(研究の限界を含める):

本研究より、妊婦の喫煙歴は出生児のトリソミーや何らかの先天性形態異常の発症の増加と関連することが明らかとなった。本研究の限界として、トリソミーのオッズ比上昇については、出生前診断による判定があったことで本調査から脱落した対象者による選択バイアスである可能性を否定できない。また、本研究の喫煙歴は自己申告であり客観的なデータではないこと。「何らかの先天異常」というアウトカムは、31 種類の先天性形態異常を取り扱ったが、これらを 1 つのカテゴリーにして解析したことが挙げられる。

結論:

妊婦の喫煙歴は出生児のトリソミーや何らかの先天性形態異常の発症の増加と関連していた。今後は、妊婦の喫煙により先天性形態異常がもたらされるメカニズムの解明が期待される。